

平成 28 年度 岸本国際交流奨学金
世界保健機関 (WHO) 本部 インターンシップ報告

平成 28 年 9 月 27 日

大阪大学大学院医学系研究科 公衆衛生学教室
博士課程 2 年 H.S

【目次】

1. WHO 本部 (ジュネーブ) への派遣日程
2. インターンシップ派遣の経緯
3. インターンシップのテーマと背景
4. 日本の保健医療における情報共有の課題
5. WHO タバコ・フリー・イニシアチブの広報戦略立案
6. 今後の目標 医学教育交流の拠点「アジア・コンソーシアム」の実現に向けて



【世界保健機関（WHO）本部】

1. WHO 本部（ジュネーブ）への派遣日程

平成 28 年 5 月 10 日～9 月 7 日（120 日）

【主な用務】

- ・ PND（Prevention of Non-Communicable Diseases）部門
TFI（Tobacco Free Initiative）チームでの勤務
- ・ WHO 総会への参加
- ・ WHO 事務局長 マーガレット・チャン博士とインターンとのミーティング
- ・ ジュネーブ国際機関日本人職員会（JSAG）への参加
- ・ 在ジュネーブ日本領事館でのレセプション参加



WHO 総会の様子（ジュネーブ国連本部にて）

2. インターンシップ派遣の経緯

大阪大学医学系研究科 公衆衛生学教室（磯博康教授）では、2015年度より、博士課程の院生を WHO 本部 PND（Prevention of Non-Communicable Diseases）部門にインターン（無給）として年間2名ずつ派遣している。インターンはメンターである WHO 職員のもと、生活習慣病予防と早期治療に向けたグローバルの連携と共働のあり方、国際保健の専門家としての役割を学ぶ機会を得ている。私は PND 部門 TFI（Tobacco Free Initiative）のコーディネーター Dr Édouard TURSAN D'ESPAIGNET（以下、エドワード博士）のもと、エドワード博士のチームメンバーと共に、タバコ・コントロールに関する業務に従事した。



（左）PND 部長 ベッチャー博士



（右）メンターのエドワード博士と



（左）TFI マネージャー プラサド博士



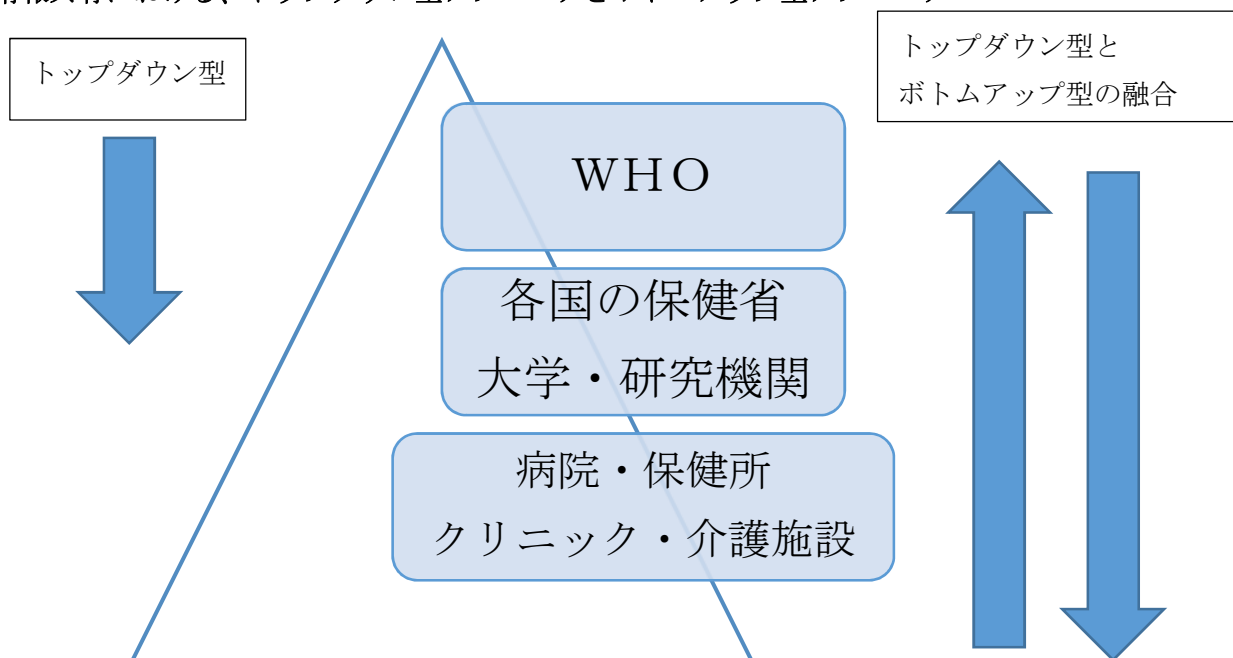
（右）事務局長 マーガレット・チャン博士

3. インターンシップのテーマと背景

インターンシップのメンターの一人である、エドワード博士とそのチームメンバーは、世界180カ国以上の疾患傾向、たばこ対策とたばこ産業のデータを集めた「タバコ・コントロール・グローバル・データバンク (TCGDB)」の研究開発を行ってきた。私の医学系研究科公衆衛生学教室（博士課程）での研究テーマは、日本と途上国における生活習慣病予防と早期治療の情報共有と、双方向・課題解決型の医療教育交流であり、「喫煙」を生活習慣のひとつと捉え、喫煙由来の疾患予防と早期治療の為に、前述の TCGDB をどのように発信し、行動変容を伴う連携を促進するかについて、企画立案を行った。

こうした企画立案を依頼された理由として、私は阪大の博士課程に進学する以前、立教大学大学院ビジネスデザイン研究科 (MBA スクール) の修士課程時代から、アジアの途上国、欧米の保健医療の課題調査を行い、教育交流プロジェクトの企画、運営に携わってきた背景が挙げられる。エドワード博士からは、私が日本の特許庁と、ヨーロッパ連合 (EU) 国連の知財機関である WIPO に Medical Facilitator®としての役務を商標登録し、実務に携わってきた経験を活かして、従来の WHO を頂点としたピラミッド型・トップダウン型のアプローチ以外の効果的なアプローチ手法についても検討するよう指示を受けた。そこで、トップダウン型に加えて、現場の声を生かしたボトムアップ型の情報共有との融合 (図 1) と、一般の人々の行動変容、医療リテラシーの向上にも寄与するプロジェクトの検討を開始した。

図 1 情報共有における、トップダウン型アプローチとボトムアップ型アプローチ



4. 日本の保健医療における情報共有の課題

WHOの職員がIDとパスワードをもとに利用できるWHOイントラネットには、WHOが独自に調査した各国の保健医療事情の他に、大学や研究機関から寄せられた調査研究報告書やワークショップの資料が保存されている。たばこコントロールであれば、13歳から15歳の喫煙・受動喫煙の実態、子供がTVや映画から受けているたばこ広告の暴露の現状などを保健省と研究機関、中学校が連携し、全国規模で調査したものを、冊子にしてWHOに提出している。欧米だけではなく、インドネシア、東ティモール、韓国などのアジア諸国のレポートも多くある中、WHO以外の組織、研究機関から寄せられた日本の保健医療の情報や研究は、イントラネットにはほとんど掲載されていない。通常は、海外のジャーナルへ投稿することで、国際的に研究成果を発表したものとみなされるが、そうした学術論文が自動的にWHOの各部門に共有される仕組みが存在するわけではない為、能動的にWHOにレポートを届け、共同研究を促進する取り組みが必要とされている。厚生省、研究機関、大学とWHOが共同実施したセミナーやワークショップの資料についても、その会議に参加した職員の手元に保管されたままになることが多く、クラウド化して共有される訳ではない。詳細な調査研究と報告書は、日本語版の冊子だけではなく、多言語の概要版の小冊子、PDFも作成し、WHOをはじめとする国際機関に能動的に届けるしくみづくりもWHOと日本側の双方の関係者にとって重要であると考えている。

5. WHO タバコ・フリー・イニシアチブの広報戦略立案

120日間に及ぶジュネーブでの貴重なインターンシップの期間の後にも、WHOとの共働と研究を継続的に実施したいと考え、以下のテーマ案をもとに、WHOとの共働により日本のたばこコントロールと生活習慣病予防の情報共有を行う、「5か年の共同研究案」をPND部長のベッチャー博士、タバコ・フリー・イニシアチブのマネージャーであるプラサド博士に提案した。初年度は、WHOのたばこ対策に関するセミナーを阪大で実施する計画を立案し、2016年9月現在、11月の阪大吹田キャンパスでのWHOセミナーの開催に向けて、WHOと阪大他の先生方、研究者とともに、準備を進めている。

**Theme: The Road to 2020 Tokyo Olympics and Paralympics
For Prevention of Secondhand Smoke
Sharing the policy of Tobacco-Control
Prevention of NCDs(Tobacco Related Diseases)**

【2016 Japan Event (29 Nov-2Dec)】

“PR Event of Tobacco Control Global Data Bank”

WHO タバコ・コントロール・グローバルデータバンクの
広報と、日本のたばこ対策（能動・受動）の情報共有

【2017 Japan Event】 “Advertising / Youth”

若年層への健康教育と広告のあり方

【2018 Japan Event】 “m Health / m Cessation”

スマートフォンや携帯端末を活用した情報共有

【2019 Japan Event】 “Smoke Free Prefecture Network”

受動喫煙防止法の運用と課題、都道府県・市町村の連携

【TOKYO 2020】 Survey and Education Program for 2025”

非感染症疾患予防・早期治療と、行動変容への取組み



WHO 本部で開催している PND のコーヒータイムセッション
(PND 部長のベッチャー博士の誕生日会をかねて、チームを越えた情報共有をする様子)

6. 今後の目標 医学教育交流の拠点「アジア・コンソーシアム」の実現に向けて
「日本の医療を途上国の医療者に伝える」「日本式医療をそのまま輸出する」という上から
目線のスタンスではなく、「ASEAN やアジア全体の保健医療の課題を共に考え、お互いの
叡智を結集して共に学び合う場」としての「アジア・コンソーシアム」の構築の検討を進
めたい。大阪大学が「場」となり、人々が集まる「拠点」となることができるよう、WHO
とアジア各国の大学、研究機関との情報共有、トップダウンとボトムアップのアプローチ
の融合を促進できるよう、公衆衛生学教室のWHOワークショップ担当として、本部、WPRO、
神戸センターの専門家との情報共有の促進と連携強化に貢献していきたい。



事務局長のマーガレット・チャン博士が主催した、
WHO 本部インターン・ミーティングの時の記念写真（2016年5月）

【謝辞】

WHO 本部でのインターンシップは、日本と途上国における保健医療の課題研究と実践の場での教育交流を検討する上で、欠かすことのできない意義深い経験となりました。

WHO の専門家を阪大に招いたセミナーやワークショップの準備や、後任のインターンのサポートなど、自分自身の研究の為ではなく、ジュネーブで学んだことを広く共有し、共に課題解決に取り組もうとしてくださる仲間を増やす努力も重要であることを学びました。貴重な機会を授けてくださった、岸本忠三先生、医学系研究科、国際交流ご担当の先生方、ジュネーブ滞在中も温かいご指導、ご支援を続けてくださった公衆衛生学教室の磯博康教授、教室秘書、院生の皆様に、心より御礼申し上げます。

平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学系研究科博士 4 年生

R. K

渡航先

スイス ジュネーブ

受入れ機関名

世界保健機関ジュネーブ本部

活動期間

2016 年 8 月 26 日 ～ 11 月 26 日

1. 留学の目的

各民族、各国の人々の健康を推進することを最高の目標にし、各国、各 NGO の協調を図っている世界保健機関の活動を体験する。そして、世界の健康課題の解決に向けて、第一線で活躍するプロフェッショナルとともに議論し合い、地球レベルで公衆衛生の各課題、特にたばこコントロールに関する現状、問題、解決策などを考える。

2. インターンシップ配属部署

世界保健機関ジュネーブ本部

Comprehensive Information Systems for Tobacco Control (CIC)局

3. 活動報告

インターン期間：2016年9月1日～11月25日

1) スケジュール一覧表

2016年8月26日 ジュネーブへ出発

2016年8月27日-8月30日 書類準備

2016年9月1日-11月25日 世界保健機関ジュネーブ本部 インターンシップ

① コンピュータ修理、計算ソフトウェアの調整

(2016年9月1日～2016年9月20日)

② データバンクの構築作業

(2016年9月21日～2016年11月25日)

③ 9回国際健康促進大会開催のお手伝い

(2016年11月6日～2016年11月25日)

2016年11月26日 大阪へ帰り

2) インターンシップの部署紹介

私がインターンシップを行ったのは、世界保健機関の中の、Comprehensive Information Systems for Tobacco Control (CIC)という部署である。

私の Supervisor は COMMAR A' Isha Alison Louise、オーストラリア人で、データバンクと Policies を担当であり。私が主に関わったのは、CICの中のデータバンクに関わる分野であった。

CIC 全体では、約 40 人のスタッフがおり。仕事内容は各チームによって異なるが、たばこに関する政策作成、地球レベルの報告書の作成、会議の運営、プロジェクトの提案と運営、UN 機関や NGO との連携促進など、さまざまであった。

3) 一日の流れ

9:00 出勤

9:00～12:00 仕事

12:00～13:00 ランチ／昼休み（ランチミーティング・セミナーなど）

13:00～18:00 仕事

18:00～帰宅 or 仕事

4) 私の仕事：

a) コンピュータ修理、計算ソフトウェアの調整

（2016年9月1日～2016年9月20日）

最初の仕事が、コンピュータの修理だった。世界保健機関CIC局は、各国から報告したたばこのデータを収集、分析して年度報告書を作っているため、170カ国以上大量データを処理する必要がある。スピーディーに分析するために、1年前に超高性能計算機を購入した。しかし、スーパーパソコンの科学技術計算ソフト——Pythonの調子が悪く、別のコンピュータで問題のない計算プログラムは、新パソコンでRUNをし

たら何百のエラーが出て、使い物にならなかった。Python はオープンソースソフトウェア (Open-source software, 略称: OSS) なので、修理と調整は自力でしなければならない。Alison 先生は私にソフトの instruction manual を渡して、「このコンピュータの修理をしてみてください」と指示をされた。修理とソフトの調整は辛い仕事であったが、毎日エラーと計算失敗で修理を続けて、3 週間かけて、何百の失敗を取り戻し、最後は Python の instruction manual を丸ごと書き直して、スーパーコンピュータは無事に使えるようになった。Alison 先生は大変喜んだ。私はインターン前に自分が貢献できるか懷疑があったが、「世界保健機関でも役に立つ人になった！」と感じた。

b) タバコデータバンクの構築作業

(2016 年 9 月 21 日～2016 年 11 月 25 日)



各国のタバコレポートのデータ入力、チェック、検索。各国たばこ報告と自国政策の一致性の確認を行った。

170 国のレポートがあるため、各国のフォーマットとデータの分析の方法は違い、仕事内容に戸惑うことも多かったが、次第に慣れ、スムーズに進めていくことができた。また、スーパーバイザーも非常に優しく、詳しく面倒を見てくださったので、安心して仕事することができた。

c) 第 9 回国際健康促進大会開催の手伝い

(2016年11月6日～2016年11月25日)



第9回国際健康促進大会が11月21日上海で開かれ、世界各地から1000人あまりの代表が参加した。WHOは大会の準備に総動員で、私も大会の準備の手伝いをした。大会日程と発表者の調整、発表内容の確認などに関わって、世界レベルで仕事を携っていることを実感した。

d) セミナーとランチセミナー

ランチセミナーは週1～2回の頻度でスタッフ向けに開かれていた。

ランチセミナーの講演は各トピックにおける専門家で行う。そのため、WHO内にいながらにして最新の動きを捉え、情報を得られることができた。

ランチセミナーだけではなく、大規模なセミナーも多かった。例えば、10月上旬から世界保健機関の入口で「砂糖飲料水課税へ」の大きい看板が掲げられる、1週間後、円卓を囲む天井の高いWHO本部のメインホールで討論セミナーは開かれ、私も参加した。世界保健機関の専門家は「糖分が多い清涼飲料水を取りすぎることが、肥満と糖尿病が増える原因になり、20%以上の課税をすれば、人々の摂取量を大きく減らせる」と主張、糖分が多い清涼飲料水に課税制度を提唱した。



セミナーが終わって 30 分後、日本を含む多くの国の新聞媒体は

「世界保健機関（WHO）は 11 日、世界的に増加傾向にある肥満や糖尿病への対策として、砂糖を多く含む清涼飲料水への課税強化を各国に呼び掛けた。たばこと同様、課税により消費を抑える効果があるとしている。」

という記事が出した。

その瞬間、そこまで世界の健康、医療、世界を変えるイベントに参加、関与していることに感動した。

インターンの感想と今後の抱負

今回、初のヨーロッパかつ三か月の滞在であった。最初は不安もありましたが、スーパーバイザーを初め、スタッフに恵まれ、有意義なインターンシップとすることができた。また、他のスタッフの様子を見たり、話を聞いたりする中で、WHO でどのようなことが行われているのか、WHO スタッフはどのようなことを考えて仕事をされているのか理解することができた。インターンを通して、各国からのスタッフと一緒に仕事の協力、ディスカッションをし、同じ目標に向かって、さらに、国際色豊かで多様なバックグラウンドの人々と友だちになれ、幸いに思う。

今後の抱負であるが、私は大学、大学院は公衆衛生専攻一筋であり、国際医療に関心もある。日本での研究をもとに、将来的に国際協力研究も目指したい。国家間を超え、国際公衆衛生課題を認識し、立派な公衆衛生課題の研究者になりたい。

謝辞

今回の留学に際し、岸本交際交流奨学金基金の岸本忠三先生、公衆衛生学の磯博康先生、世界保健機関のアリソン先生とエドワード先生、医学科国際交流センターの馬場先生、その他お世話になった方々に、心からお礼を申し上げます。